

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	《Le Bourgeois gentilhomme》と二人の批評家
Author(s)	熊沢, 一衛
Citation	フランス文学, 16 : 16 - 23
Issue Date	1986-05-10
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040954
Right	
Relation	



《Le Bourgeois gentilhomme》

と二人の批評家

熊 沢 一 衛

この小論は、Molière の『町人貴族』le Bourgeois gentilhomme をめぐっての二人の「批評家」Voltaireと Baudelaire の批評を比較・検討し、その背後にある考え方を見ようとするものである。Molière のこの作品は1670年10月の初演で、『タルチェフ』や『人間嫌い』などの喜劇の最高傑作のあとで書かれたものである。これはまた comédie-ballet の系統に属している。成り上りのブルジョア Jourdan 氏が貴族の趣味を身につけようとしたり、娘も貴族以外には嫁にやらないと言っていたために、ついに、トルコのマムシになる儀式でまわりの人にはめられてバカ扱いをうける。

Voltaire はこの作品をどう見ていたのだろうか。1732年の 《 Vie de Molière avec de petits sommaires de ses pièces 》の中に彼の批評がわずかに見られる。これは Molière の作品集の序文にあてるべく書かれた小品で、ごく簡単な作家の略歴と作品の解説が中心であるが、《 le Bourgeois gentilhomme 》を扱った個所の後半分で次のように言っている。

この作品の4幕までは、一つの喜劇として通用するだろう。第5幕は笑劇であって、おかしくはあるが、余りにも本当らしさがない。モリエールは、トルコ国王の息子以外の別の男を想定していたなら、もっと非難されることも少なかったろう。しかし、彼はこうした気晴しを入れることで、きちんとした作品を作るよりもむしろ人々を笑わせようとしたのだった。⁽¹⁾

この批評文の特徴は、4幕と5幕の間に断絶のあることを言い、5幕を trop peu vraisemblable だとし farce と認める。つまり、comédie より一段低級なものとしている点にあらう。`断絶`の有無については後程触れることにしよう。本当らしさ(vraisemblance)を基準としている点に関しては誰も次のように言うことに異論はなかろう。即ち、vraisemblanceの理論は、17世紀の古典主義文学理論の中核であり、三単一の法則よりもさらに奥にある規準で、これを振りかざしている点で Voltaire はやはり古典主義

の継承者であった、と。

次に **comédie** と **farce** とを分けて考えている点について多少考えてみよう。この二つの統一は **Molière** のテーマの一つでもあったから余計に一考の価値がある。ところがこの作品に関する限り、喜劇に笑劇が入ってしまったという判断は無理が伴う。小場瀬氏も述べているように、構想の段階から、作者は真実らしからざる筋（トルコ儀式）を中心にした笑劇を創ろうとしたのであり、むしろその中に **Molière** が現実から切り取ってきた、なまなましい風俗の描写やそれに対する鋭い諷刺を持ち込んだと見るべきだろう。⁽²⁾

私としては、**Voltaire** がこの作品を **comédie-ballet** —サブタイトルにもあるように—として観ることを失念していることに注目したい。たしかに彼は **comédie-ballet en prose et cinq actes, faite et jouée à Chambord** というようにこの作品を紹介はしている。しかしそうしたものとしての評価のなかったことは、先の引用文に見る如くである。この失念の原因にはいろいろあると思われるが、私見によれば、**Voltaire** の喜劇観が背後で強く作用していたのではないかと思われる。

そこで次に **Voltaire** の喜劇観についてごく簡単に触れておきたい。⁽³⁾ まず、彼が古典主義の継承者であったことは先に述べた通りである。しかし彼なりの、時代に即した革新性も持ち合わせていたことも否めない。当時流行していた **La Chaussée** らのお涙頂戴式の喜劇 **comédie larmoyante** を念頭において述べた彼の持論の一つを次に引用してみよう。

もう一度繰り返すならば、喜劇はそれ故、夢中になったり、カッとなったり、感傷的になってもかまわぬが、その後で紳士達を笑わせるならばの話である。もし、それが滑稽さを欠いて、ただお涙頂戴式であるだけならば、大変趣味の悪い、不愉快なジャンルになってしまうだろう。⁽⁴⁾

この滑稽さは、自然にが良く、無理に人を笑わせようとしてはいけない。もちろん、下品さや低級さへ落ち込んでいってもいけない。結局は「風俗の素朴で楽しい描写」 (**la peinture naïve et plaisante des mœurs**) をすること、具体的には **Molière** の作品では『人間嫌い』がよいし、『タルチュフ』は、もっと興味深い。以上が **Voltaire** の喜劇観の概要であり、このような背景をもって、先の **« le Bourgeois gentilhomme »** への批評が出てきていたのである。

次に **Baudelaire** の **« le Bourgeois gentilhomme »** についての批評を検討してみたい。といっても残念ながら、正面切った、まとまった評論はなく、彼の有名な『笑いの本質について』 **De l'essence du rire** の中に、この作品について触れている個所がわずか

にあるだけである。そこでまず、このエッセーの論旨を簡単に紹介しつつ、その個所の意味を正確に把握するよう努めたい。

まず出発点として当時流行しだした諷刺画が一つのジャンルとして成立するかどうかという問題意識がある。次に「笑い」は優越性の発露（ホブズ理論）という意見の紹介がされる。しかし、Baudelaire の独自性は、「滑稽さ」le comique を次のように分析するあたりから出てくる。彼によれば、「滑稽さ」には le comique significatif（有意義的滑稽）と le comique innocent（無垢の滑稽）とがある。前者は「普通の滑稽」であり、極端なときには le comique féroce（兇暴な滑稽）となる。後者は「グロテスク」のことであり、極端な場合には le comique absolu「絶対的滑稽」となる。もちろん、こうした客観的な分析をこのエッセーは目的としているのではなく、後者の方、即ち「グロテスク」や「絶対的滑稽」をより求めたいということが言いたいのである。彼の別の言葉でいえば、「不滅にして度し難い哄笑」hilarité immortelle et incorrigible を起させるものは何かを追求したいのである。

具体的な話に次はなって、フランスでは圧倒的に「有意義的滑稽」が多いことをやや“糾弾”するかのよう語る。

フランス、明瞭な思考と論証の国であり、芸術が自然に、また直接に効用性を目指しているこの国では、滑稽は一般に有意義的である。モリエールはこの種類における最上のフランス的表現だった。しかし、われわれフランス人の性格の根底には、およそ極端なものから遠ざかろうとする傾向があるので、またあらゆるフランス的情熱、あらゆるフランス的学問、芸術の特徴の一つに過激なもの、絶対なもの、深遠なものを避けるということがあるので、帰結として、この国には兇暴な滑稽というものはほとんど見られない。同様に、われわれのグロテスクもまれにしか絶対的滑稽にまでは到らないのだ。¹⁵⁾

こうしたフランス的 bon sens への攻撃的姿勢の背後に、阿部良雄氏は「遅れてきたロマン派詩人」Baudelaire の過激性を見ている。これは興味ある、またこの小論にとって有益な指摘となろう。¹⁶⁾

次にこうした「有意義的滑稽」の長く続いてきた伝統—彼は filon（鉱脈）ということばを使う—の中にも、例外的存在はあることはあるという。グロテスクな描写、絶対的滑稽の表現、無垢の滑稽さがそうした伝統の中に見えかくれするように存在するという。

（真のグロテスクに属する）ものとしては、モリエールのいくつかの幕合劇がある。

これらは不幸にして読まれることが少なく、また演じられることも少ないのであるが。それらのうち、とりわけ『気で病む男』と『町人貴族』の幕合劇とジャック・カロの描いた突飛な人物をあげねばならない。ヴォルテールのコントの滑稽さについては、それは本質的にフランス的であって、その存在理由をいつも優越性の観念から得ている。それは全く有意義的である。⁽⁷⁾

《 le Bourgeois gentilhomme 》, 特にその幕合劇 *intermèdes* への共感が *Voltaire* のコントへの批判と同時に語られていて興味深い。Voltaire は先に引用したように、第5幕目は4幕までと違って（断絶があって）*farce* になり下っているとしていた。しかしよく見れば、第4番目の幕合劇である、いわゆるママムシの儀式は第四幕目からはじまり、5幕へと自然に続いており、テキスト本文の内容とも密接な関係にある。⁽⁸⁾従って、ごく大ざっぱに言って、Voltaire が低く評価した個所を逆に、Baudelaire は高く評価しようとしていると言えよう。

次に、この Baudelaire における反ヴォルテールの感情について少し調べてみたい。まず言えることは、それが一過性のものではなく、根が深いということである。『赤裸の心』*Mon cœur mis à nu* の中に最もはっきりとした形でそれが表われている。

私はフランスでうんざりしている。とりわけ、ここでは皆がヴォルテールに似ているからである。エマーソンはその『人類の代表者』の中でヴォルテールをとり上げるのを忘れていた。彼は、こういうタイトルですばらしい文章を書くことが出来たのに。即ち、「ヴォルテール、反詩人、野次馬どもの王様、うすっぺらな連中の殿様、反芸術家、門番たちの説教師、『世紀』誌の編集者たちのあいもかわらぬ父親」。⁽⁹⁾

『世紀』誌は当時のブルジョア的合理主義、進歩主義を代表する新聞で、Baudelaire にとっては嫌悪すべきブルジョアの指導者＝編集者の集団である。彼らの信奉するヴォルテールへの反感が実際のヴォルテールへの反感と重なり合っていることを引用の後半は示している。

同じ作品のすぐ後にも次のような反ヴォルテールの記述がある。

『チェスターフィールド伯の耳』というコントで、ヴォルテールは9ヶ月もの間、くそと小便の間に住んでいたこの不滅の靈魂について茶化している。ヴォルテールは、すべてのなまけ者同様、神秘的なものを嫌っていたのだ。⁽¹⁰⁾

このコントは真のテーマは何か専門家の間でも結論が出ていず謎めいているが、**Baudelaire**の非難している「靈魂」についての記述は **Voltaire** が書いているのは事実としても、作中の外科医 **Sidrac** が述べているものである。**Sidrac** は上のように言うことで靈魂などの存在を否定しようとする訳である。**Voltaire** 自身は、こうしたむずかしい問題に対しては「無知の哲学者」 **philosophe ignorant** であると慎重な態度を見せている。

話を **Molière** とその作品にもどして、二人の批評家の "対立" を次に見てみよう。
『赤裸の心』には『タルチュフ』について次のような記述が見られる。

モリエール、私の『タルチュフ』についての意見は、これは喜劇ではなく、パンフレットであるということだ。無神論者で育ちのよい人なら、この作品については、ある種の重大な問題はバカな奴には任せるべきではないと考えるだろう。⁽¹¹⁾

一方 **Voltaire** にとって『タルチュフ』はすでに述べた様に秀れた作品であった。

《 **Vie de Molière avec de petits sommaires de ses pièces** 》 からその意見を要約すれば次のようになる。『人間嫌い』も立派な喜劇であるが『タルチュフ』はそれよりさらに際立った興味をそそる。クレアントの台詞はフランス語で書かれた最もすばらしい説教である。登場人物たちはすべて独創的であり、特にタルチュフのそれは完璧である。⁽¹²⁾

このような対立を生む原因は何か。最後に **Baudelaire** 自身の演劇観・特に喜劇観をさぐってみることにしたい。先に引用した『笑いの本質について』から自ずとその一部は浮かび上がってくるのではあるが、もう少しつき進むならば、『道義的な演劇と小説』というエッセーが重要な手がかりとなろう。

この作品は、当時流行の劇作家であった **Emile Augier** の作品をとり上げて、そこで説かれている「美德」のブルジョア性や軽薄さに反発、うそで道義的な作品を書く連中の偽善、また人々にモラルを押しつける作品を激しく糾弾する。その最後の部分でこう語っている。

私は再びこの問題（演劇）については論じるつもりである。二人のフランスの偉大な人物、バルザックとディドロが演劇をよみがえらせる為に行なった様々な試みについて語るつもりだ。⁽¹³⁾

しかし、この約束は果されなかった。ただ同じ頃のノートに「書くべき論文」として、『劇作家バルザック』と書かれていたこと、及び、1854年頃の手紙に、ディドロの『善人か

悪人か』 *Est-il bon? Est-il méchant ?* を上演すべく奔走している様子がかがえること、この二点が手がかりである。⁽¹⁴⁾しかし、『劇作家バルザック』の方はこれ又、書かれなかったもので、われわれには何も得られない。が、小説家バルザックという今日の常識を破っている的で魅力的である。後者の手紙——当時の *Gaîté* 座の支配人 *Hostein* 宛——には次のように書かれている。

登場人物はすべて実在の人々です。（これは珍しいことです）……女性たちは数多く、大変おもしろく、魅力的です。この作品は正確に言って、ディドロの唯一の秀れた劇作品です。『私生児』も『一家の父』も比較になりません。⁽¹⁵⁾

普通考えられるディドロの代表作品を排して、このように『善人か悪人か』を高く評価しているところにまず意味があろう。*Hardouin* という主人公——ディドロ本人らしい——が人の為に良かれと思って（あるいは、本気にはそう思っていなかったかも知れない）することが次々に人を怒らせる結果になっていく。彼は本当に善い人なのか悪い人なのかわからなくなる。こうしたドラマが *Augier* 作品には見られぬ人間の真実をついていとおそらく *Baudelaire* には思われたのだろう。これが、『笑いの本質について』で求められていた、あの「無垢の滑稽」や「絶対的滑稽」とどう結びつくのだろうか。*Baudelaire* の喜劇観と合わせて、今後の研究課題としたい。

〔結び〕

今日から見ると、*Voltaire* が守ろうとした、あの *vraisemblance* の考えが完全に消え去ったとは思えない。フランスの古典主義はそれほど強いものようである。又、消え去るべきでない本質——真実らしさが美しい作品をつくるという点——もそこには含まれているように思われる。「過激な」*Anti-Voltairien* としての *Baudelaire* 自身も、美の近代性を求めつつも、美の中に永遠で不変の要素の含まれていることは否定しない。ただ、相対的で状況に即した要素と結びついてこそ、それが生かされるとしてはいるが。⁽¹⁶⁾このことを、「笑い」や喜劇に応用して、私見を述べるならば、*Baudelaire* は「有意義的滑稽」の伝統に「無垢の滑稽」をなんとか結びつけたかったのではなかろうか。ところが実際には、伝統は余りにも強く、それに反抗する時には、激しい糾弾の表現となって出てしまった。それが先に引用した遺稿集『赤裸の心』の数々のアフォリズムである。

ベルグソンの「笑い」は周知のように、主としてモリエールの作品を巧みな知性で分析した、笑いの哲学的考察である。笑いは、一種の機械的なこわばりが発生した時、それを徴罰してほぐす役割りをする。これが笑いの社会的効用であると言う。従ってベルグソンは

Baudelaire のいう「有意義的滑稽」のみを研究対象としているのである。しかし、その第3章の4で、遅まきながら Baudelaire のいうもう一方の滑稽にあたると思える滑稽——ゴーチエのいう常軌を逸した滑稽 *le comique extravagant* ——について語り始める。¹⁷しかし、われわれとしては、ベルグソンがこれをうまく処理出来ず、もて余しているという印象を持たざるを得ない。この意味において Baudelaire の推奨する笑いや『町人貴族』の中の笑いの部分の特異な評価は今日的意味をまだ持っていると言えよう。

さらに社会の到るところに「機械仕掛け」や「こわばり」「自動現象」がある今日、「笑い」による社会に対する——社会からのではなく——懲罰が人間の為に必要である。これをしも、Baudelaire は「有意義的滑稽」だと言って排するだろうか。

〔注〕

- (1) Voltaire: *Vie de Molière avec de petits sommaires de ses pièces*. 1739. *Oeuvres complètes*, éd. Louis Moland, t. 23 pp. 121 – 122.
(以下 O. C. と略す)
- (2) 小場瀬卓三著：モリエールのドラマツルギー（1957. 白水社）pp. 254 – 255.
- (3) 拙論『Voltaire と喜劇』（広大紀要『言語文化研究』VOL. XI）に、より詳しく論じている。
- (4) Voltaire: *Préface de Nanine*, 1749, O.C.t. 5 p. 10.
- (5) Baudelaire: *De l'essence du rire*, Ed. l'Intégrale p. 387.
阿部良雄氏の訳を利用させてもらった。
- (6) 阿部良雄：反＝フランス的詩人ボードレール、『学燈』1984年1月号 pp.12–15
- (7) Baudelaire, op. cit., p. 388.
- (8) 日比野雅彦：モリエール『エリード姫』におけるコメディ・バレーの構造、『フランス語フランス文学研究』No.47. pp. 111 – 112 参照。
- (9) Baudelaire: *Mon cœur mis à nu*. Pléiade t. I. p. 687.
- (10) Ibid. pp. 687 – 688.
- (11) Ibid. p. 701.
- (12) Voltaire, op. cit., pp. 111 – 118.
- (13) Baudelaire: *Les drames et les romans honnêtes*, Garnier. p. 571.
- (14) 佐藤正彰訳『ロマン派芸術下』（河出. 昭23）及び Garnier 版の注を参照。
- (15) à Hippolyte Hostein, le 8 nov. 1854. Pléiade Correspondance I. p. 299.

- (16) Baudelaire: *Le peintre de la vie moderne*, Garnier, pp. 455 – 456.
- (17) Henri Bergson: *Le rire*, PUF. pp. 138 – 147. 林達夫訳（岩波文庫）の注,
P. 202 参照。